様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：14301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21710259
研究課題名（和文）　カンボジア仏教の再生と変容に関する総合的研究：ヒト・モノ・カネの移動と制度の再編
研究課題名（英文）　Rebirth and Transformation of Cambodian Buddhism: A Study on the Mobility of People, Objects, Money and the Institutional Reform
研究代表者 小林　知（KOBAYASHI SATORU）
京都大学・東南アジア研究所・准教授
研究者番号：20452287

研究成果の概要（和文）：本研究は、文化人類学・社会学の方法を用いた地域研究の立場から、上座仏教徒社会カンボジアの農村部を中心とした仏教施設（寺院）とサンガ（僧侶組織）におけるヒト・モノ・カネの移動の実態と宗教制度の変遷に関する現地調査を行い、極端な全体主義的支配により同国の仏教的伝統を断絶に追いやった民主カンプチア政権（1975～79 年）期以降のカンボジア仏教の再生と変容の実態を総合的な形で考察した。

研究成果の概要（英文）：This project conducted a series of field research in rural Cambodian temple-monasteries for exploring the actual process of rebirth and transformation of Cambodian people's religious activities in recent years. Cambodian Buddhism suffered a complete shutdown by the totalitarian rule of Democratic Kampuchea (1975-79). The analysis of historical experience of Cambodian Buddhism since 1979 would definitely contribute toward the understanding of Theravada Buddhism and society in mainland Southeast Asia from a comprehensive perspective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：上座仏教、宗教と社会、東南アジア、カンボジア、地域研究、文化人類学

１．研究開始当初の背景

（1）東南アジア大陸部の低地社会に住む人口の大多数は、インドからスリランカ経由で 11～14 世紀頃伝来したとされる上座仏教を信仰する。事実として、インドシナ半島の南部に位置するカンボジアの人々の仏教実践は、タイ、ラオス、ベトナムのメコンデルタ地域、そしてミャンマーや中国雲南省南部に住む仏教徒のそれと共通する性格をもつ。そのため、この地域は、上座仏教文化圏とも呼ばれる。しかし、カンボジア仏教はそのなかで、特別な歴史をもつ。つまり、1975～79 年に同国を支配した民主カンプチア政権の支配の下で、カンボジアの人々の仏教実践は、伝統の断絶を経験している。

（2）上座仏教徒の社会は、出家者（僧侶）と在家者（俗人の老若男女）からなる。出家

者は俗世を離れ、仏陀が定めた227戒を守って修業生活を送る男性である。僧侶は乞食によって生きるため、在家者からの支援が不可欠である。在家者は、僧侶へ食事やその他の物資を寄進することで、功徳を得る。上座仏教を信仰する人々の宗教行動は、この功徳の観念が支える。功徳は、仏教の発展に寄与するあらゆる行為から生じる。功徳を多く積むことによって、現世の将来から来世にわたる自らの境遇がより良き状態へ導かれる、と人々は信じている。功徳はまた、儀礼行為を通じて物故者を含む他者へ廻向される。

（3）カンボジア語でヴォアットと呼ばれる仏教寺院は、第一義的に、サンガ（僧侶組織、出家者の集団）の修業生活の場である。しかし、実質的には、積徳を願う者全てに開かれている。寺院はまた、社会的・経済的・政治的に様々な背景をもった人々が、仏教徒であるという理念上の同一の立場で会し、緩やかなネットワークを築く場である。上述した功徳の獲得という宗教的な行動の原理が、そこでの集合的行為を促す。しかし、その地域で生活する人々の諸活動が歴史的に形成してきた社会的結合の形と、社会経済的・地政学的な条件が生みだす権力関係が、個々の寺院での活動を個別の形へと導いている。

（4）指導者の名前をとってポル・ポト政権とも呼ばれる民主カンプチア政権は、「不信仰の自由」を憲法で主張し、伝統的な年中行事を始め、カンボジアの人々が慣習的におこなってきた宗教的実践を全面的に停止させた。さらに、国内の僧侶を全て強制的に還俗させ、寺院の建造物や仏像を破壊し、同国の仏教伝統と実践に断絶をもたらした。1979年にポル・ポト政権が崩壊すると、その後を継いだ社会主義政府による政策的な支援を受けて、カンボジア国内に僧侶が復活した。しかし、その政府は同時に、成年男子の出家行動に厳しい制限を課した。結果として、1980 年代のカンボジア国内の仏教活動の復興は低調に押さえられた。カンボジアの人々が仏教徒としての活動を大きく活性化させ、ポル・ポト時代に破壊された寺院施設の再建などに本格的に乗り出したのは、1990 年代半ば以降のごく最近のことである。

（5）カンボジア仏教の世界観と歴史については、古くはフランス人行政官の Adhémard Leclére、近年では英国の仏教学者 Ian Harris による網羅的な書籍が提出されている。また、1990年代以降、林行夫、Charles Keyes、高橋美和、John Marston などの人類学者がフィールドワークにもとづく分析を公表している。しかし、前者は文献研究である。また後者も、制度と実践、都市と農村といった今日のカンボジア社会を特徴づける重要な局面を相互に関連付けて、1979 年以降のカンボジアの宗教と社会の全体像を論じるものではなかった。カンボジア仏教は、1970 年代から現在までの30年余の間に、＜断絶＞、＜再生＞、＜変容＞という非常に特徴的な状況を経験してきた。フィールドワークを通じて現地で収集した資料にもとづき、その一連の歴史経験の動態を総合的な見地から考察することが本研究のねらいである。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の三つである。

第一の目的は、カンボジア仏教の制度と実践をその社会に生きる人々の日常的な生活世界と社会的結合にかかわる形でとらえ、ポル・ポト政権の支配がもたらした伝統の断絶という現実に向き合いながら、その変化と持続を地域の文脈で記述し、分析することである。

次いで、第二の目的は、政治社会学的な関心から行われてきた上座仏教徒社会における国家と宗教の関係についての先行研究の成果を踏まえ、カンボジアにおけるサンガと政治権力の関わりを検証し、周辺諸国の上座仏教徒社会を視野に入れた比較研究の礎を築くことである。

最後に、第三の目的は、近代化の過程で国家を単位として生じた制度と実践の中央集権化のダイナミクスを後付けつつ、また国内の都市部と農村部、さらには国家の枠を越えて営まれる仏教徒・僧侶のネットワーキングの実態を明らかにし、カネやモノの具体的な流れからみる諸相をグローバル化時代の宗教活動の一側面として考察することである。

３．研究の方法

本研究は、現地社会における計画的なフィールドワークの実施を第一の方法とする。研究代表者は、2000年よりカンボジア農村で社会と文化の動態に関する調査研究を開始し、2003年からは宗教制度の検討にも一部着手していた。2009年度に開始した本研究では、ポル・ポト時代以後のカンボジア仏教の再生と変容を、具体的な地域の文脈から、そして制度と実践の間のギャップとその相互関係に配慮した視点に立って解明し、総合的に考察するため、以下のような調査と分析を実施した。

（1）<u>カンボジア王国コンポントム州における仏教施設の悉皆調査：</u>同国の国土のほぼ中央に位置するコンポントム州の87の仏教施設を訪問し、施設における活動の実態を聞き取る調査を行った。また、現地の調査アシスタントの助けを得て、それらの施設に起居していた1000名余りの僧侶・見習僧・俗人の

経歴情報を収集した。この調査では、地域の歴史に根ざした人々の宗教活動の現状と変化に関する情報を集積すると共に、新たな施設が建設される過程の特徴や、近年の農村出身男子の出家行動の傾向、一時出家した男子が還俗を行うタイミングなどの問題に関する、基礎的な資料を得た。

（2）カンボジア国内の他地域における短期調査：2010 年度には、カンボジアとラオスの国境地帯にあるストゥントラエン州で短期調査を行った。訪問した施設は 10 カ所余りであったが、同地でのクメール人とラオ人の間の民族間関係、1960 年代に本格化していたカンボジア政府による国民統合政策からの影響、地元男子による出家行動の特徴などの論点に関する資料を収集した。

カンボジア国内ではその他、トンレサープ湖南岸に位置するポーサット州でも、2012 年度に仏教施設の訪問調査を実施した。

（3）首都の関係諸機関での聞き取り調査：カンボジアの首都プノンペンにおいて、宗教省、全国サンガ組織の役職僧のオフィス、仏教高等学校・仏教大学などの機関を訪問し、宗教行政を担当する役人氏やサンガ組織の中枢機関で活躍する僧侶らに聞き取り調査を行った。それにより、今日のカンボジアの都市部にみられる仏教実践の特徴を確認すると共に、ナショナルな宗教（制度宗教、国家宗教）としてのカンボジア仏教の現状に関する情報を収集した。

（4）タイ王国スリン県での聞き取り調査：カンボジアと国境を接するタイ国スリン県を訪問し、国境を越えてカンボジアから移動してくる僧侶・俗人信徒のネットワーキングに関する情報を収集した。スリン県の寺院ではまた、ベトナム領メコンデルタ出身のクメール人僧侶とも遭遇し、ベトナムからカンボジアへ、カンボジアからタイへと展開したトランスナショナルな移動経験についても聞き取り調査を行った。

４．研究成果

本研究の成果は多岐にわたるが、主な論点として以下の 3 つの内容が挙げられる。

（1）再生の原動力としての歴史的想像力と出家慣行：本研究は、綿密な現地調査を通して、民主カンプチア政権期以後にカンボジア農村の人々が仏教実践を再開し、寺院施設を中心とした集合的な活動を再活性化させてきた過程を跡づけた。また、今日の仏教施設とそこに居住する約 1000 名の僧侶・見習僧の経歴を精査した。

以上から、コミュニティの人々自身が内戦以前に送った生活のなかで身体化し、培っていた知識・伝統に加えて、個々人が有する歴史的な想像力こそが、1979 年以降のカンボジア仏教再生の基盤をつくっていたことが明確になった。

例えば、本研究が仏教施設の悉皆調査を行ったコンポントム州の農村では、近年、数百年前に打ち棄てられたと考えられる遺跡の地表に露出していた考古学的遺物を、自らの宗教実践と系譜を同じくする過去の仏教徒の活動の証左と捉え、それを由縁としてその場所に改めて仏教施設を整備しようとする人々の姿が見られた。そのようにして現在と過去とを架橋するカンボジア農村の人々の宗教活動は、上座仏教徒社会が内含するその再生力が、人々の力強い歴史的想像力にあることを例証していた。

一方、本研究が行った 1000 名を超える僧侶・見習僧の経歴情報の分析からは、カンボジアの男性人口による出家行動が、若年者だけでなく、50〜60 歳代の老齢男性によっても途切れることなく続いている状況が明らかになった。

既述のように、民主カンプチア政権下で断行された強制還俗政策により、カンボジア国内ではいったん仏教僧侶が消滅した。僧侶は 1979 年に復活したが、それから約 10 年間は、社会主義政権の下で 50 歳以上の老齢男性にしか出家が許されなかった。世俗権力の介入により、出家行動に制限が科せられたこのような状況は、一見、仏教徒社会のノーマルな形と大きく異なった状態として考えられる。しかし、今日の僧侶・見習僧の出家経験を分析し、高齢になって初めて出家を決意する老人男性の出家行動が、地域の男性のライフヒストリーのなかにごく普通の現象として見られる事実が明らかになったとき、常態を外れたものとして考えられてきた 1980 年代の出家を巡る状況の特異性は、一気に消え去る。それが明らかにする実践行為としての出家行動の柔軟性は、民主カンプチア政権以後のカンボジア仏教の再生のダイナミズムにおいて大きな役割を担っていたと考えられる。

歴史的想像力による断絶の架橋という営みに加えて、老齢者による出家という宗教的文化の存在は、間違いなく、カンボジア仏教に内在するレジリアンスの一つであり、民主カンプチア政権期以後にその再生を推し進めた力の源泉であったといえる。

（2）ローカル・レベルの連続性とナショナル・レベルの非連続性：国内の仏教施設の数の推移や、各種仏教活動の規模と活性化の程度を指標とした場合、1979 年以降のカンボジア仏教の再生は 1990 年代半ばまでに内戦以前の水準を回復したといえる。しかし、人々の仏教活動は、新しい社会・経済・政治的な

環境の下で不断の変化に向かい、従来なかった形の多様性とギャップを生み出してもいる。その一つは、国内の出家者数の減少である。カンボジアの出家者数は、1979 年以降右肩上がりに増加してきたが、2004 年から突如減少に転じた。

本研究は、2009～2011 年にかけて、農村部と都市部におけるカンボジア人僧侶・見習僧の経歴情報を収集した。その分析からは、農村部出身の僧侶・見習僧による都市部への移動の実態が明らかになった。出家行動と移動経験の間の相関については、カンボジア社会一般における世俗教育の普及・発展のプロセスとの関連など、併せて検討すべき課題が多い。しかし、そこからは、出家者数の減少という近年のカンボジア仏教の変容の一局面の理解に直結する成果が期待できる。

一方で、本研究は、近年のカンボジア仏教の制度的側面についても情報収集と分析を進めた。そのなかでは、特に、今日のカンボジアの全国サンガ組織には、内戦以前の過去との「非連続性」が顕著である点が明らかになった。

全国サンガ組織は、首都にいる大管僧長（サンガ長）と長老会議をトップとしたヒエラルキー構造をもつ。具体的には、各州に 1 名の州僧長、各郡に 1 名の郡僧長が代表者として、国内に遍在する寺院施設に止住する僧侶・見習僧らを中央集権的に統括する全国組織の機構である。カンボジアでは、1940 年代にその枠組みが王令で定められた。断絶後は、1991 年に、内戦以前の枠組みを踏襲する旨の宣言がなされた。

すなわち、今日のカンボジアの全国サンガ組織の構造は、内戦前の全国サンガ組織と同一のデザインを示す。ただし、その内実には、過去と大きく異なった部分がある。例えば、過去のサンガでは、安居数（出家後の年数）の多さと、経典学習の修了程度が、サンガ内の僧侶間関係を秩序づける原理として重視され、尊重された。しかし、今日のカンボジア・サンガでは、安居数や教育程度といった要素が僧侶のキャリア上、必ずしも重要なポイントとなっていない。事実、州レベルのサンガの首長である州僧長に近年就任した僧侶の例を見ると、年齢が若く、出家経験もさほど長くない僧侶が、政府高官との間の政治的なコネクションを支えに就任した例がみられる。

代表者は、これまで、カンボジア農村で行ったフィールドワークを通して、コミュニティのレベルのカンボジア仏教の再生には過去との高い連続性が認められることを明らかにしてきた。しかし、ナショナルなレベルでの仏教制度とその内実については、過去との「不連続性」が顕著に現れていることが、本研究の調査を通じて明らかになった。

（3）僧侶・見習僧のトランスナショナルな移動：本研究は、カンボジア国内外へ広がる僧侶・見習僧の移動行為を、その移動を受け入れる場としての仏教施設の性質や、移動を管理しようと為政者が策定した仏教政策の特徴と合せて調査した。それにより、近代的な国家の形成が始まって久しい今日の状況下でも、僧侶・見習僧の越境移動が継続してみられる事実が明らかになった。

本研究が特に注目したのは、ベトナムのメコンデルタ地域出身のクメール人僧侶の越境移動である。その一部は、本国の世俗権力から逃れることを目的とし、移住先のカンボジアやタイの仏教秩序にアジールを求めるものであった。それは、東南アジア大陸部の上座仏教徒社会にもともと近代国家建設以前からみられた僧侶の広範な移動が、現在も生き生きと継続している様子を示すと同時に、ナショナルな宗教の枠組みとは別に、東南アジア大陸部の上座仏教徒社会に生きる人々の宗教的世界の水平的な接合のあり方をより詳しく調査し、分析する必要性を示唆していた。

以上の 3 つの論点については、部分的に、論文および学会発表を通じて公表を終えている。今後は、成果の全体を包括するまとめを、単著あるいは関心が重なる他の研究者との共著の形で執筆し、公開する準備を進める。

また特に、仏教施設の悉皆調査と僧侶・見習僧の経歴調査を通じて蓄積した定量的データについては、デジタル地図を用いたマッピングなど、情報学的な手法を用いた可視化と分析を推し進めてゆく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

（1）小林知、「カンボジア農村における仏教施設の種類と形成過程」、『東南アジア研究』京都大学東南アジア研究所、査読有り、51 巻 1 号、2013 年 7 月刊行予定（採択済み）。

（2）小林知、「カンボジア農村における死者儀礼」『アジアの神々と仏教』法蔵館、査読無し、2012 年、129-147 頁。

（3）小林知、「カンボジアにおけるサンガの断絶と復古」『宗教研究』85 巻 4 輯（371 号）、査読有り、2012 年、135-136 頁。

（4）小林知、「カンボジアとラオスの仏教」『静と動の仏教　新アジア仏教史 04　スリランカ・東南アジア』奈良康明、下田正弘、林行夫編、佼成出版会、査読有り、2011 年、265-322 頁。

〔学会発表〕（計 7 件）

（1）Kobayashi Satoru. “Khmer Buddhism in

Time and Space: Integration Field Research and Document Research”. *Mapping Practices of Theravadin in Mainland Southeast Asia in Time and Space.* February 27, 2013. Chulalongkorn University (Thailand).

(2) Kobayashi Satoru.”Profile Analysis of Religious Figures in Rural Buddhist Temples: A Case Study in Kampong Thum Province”. *Imaging Cambodia: Cambodia Studies Conference.* September 15, 2012. Northern Illinois University(USA).

(3) 小林知、「森にセイマーを見いだす:『浄域』にみるカンボジア仏教再生の動態」第87回東南アジア学会研究大会、2012年6月2日、京都文教大学。

(4) Kobayashi Satoru. “Discovering a sima in a forest: An Analysis of Cambodian Perceptions of Buddhist Tradition and Practice. *The 2012 Annual Conference of Association for Asian Studies, Panel: Simas, Discourses, Practices, Histories.* March 16, 2012. Toronto (Canada).

(5) 小林知、「修行、公的教育、アジール：現代クメール人の出家行動の動態と多義性」地域研究コンソーシアム若手研究者ワークショップ「公と私を結ぶ―東南アジアから考える新しい共生のかたち―」、2012年1月8日、京都大学稲盛財団記念館大会議室（主催：地域研究コンソーシアム、京都大学東南アジア研究所、京都大学地域研究統合情報センター、共催：東南アジア学会関西例会)。

(6) 小林知、「カンボジアにおけるサンガの断絶と復古」、第70回日本宗教学会学術大会、2011年9月3日、関西学院大学。

(7) Kobayashi Satoru. “Sīmā and Bāramī: A Quest for Regional Formation of Buddhist Worldview”. *The XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, Panel: “Relics of Cambodia”*. 21 June, 2011. Taipei (Taiwan) .

〔図書〕(計1件)

(1) 小林知、『カンボジア村落世界の再生』京都大学学術出版会、2011年、528頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　知 (KOBAYASHI SATORU)

京都大学・東南アジア研究所・准教授

研究者番号：20452287